

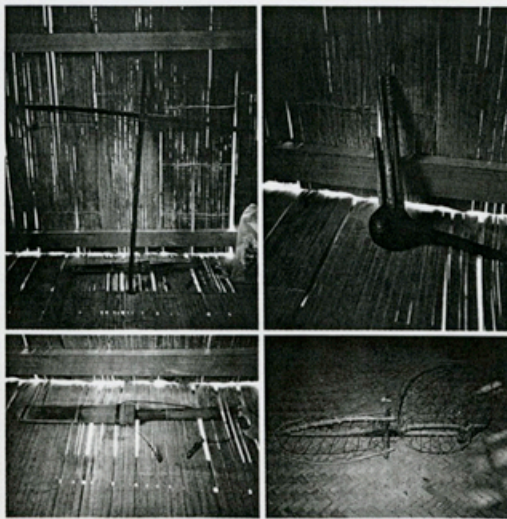
ラフ族



山地区少数民族の人たちは室内にいるとき、どういふ坐り方をしていのか。平地住居で床が土間の場合は、手摺りのものに腰掛けるのが普通だが、高床住居の場合は、いろいろの坐り方が交錯して、それが昔からのものであるとか、それぞれ使いわけがありその中にはある民族特有のものがあるのかあったのかなど、そう簡単に見分けられるものではない。ただ興味をそそられるのは、日本でも昔、年寄りや道端で足が腫れ、途中で疲れてくる足の裏を地面につけたまましゃがみ込んで足をつけているのを見かけたものだが、あの姿勢で床に置いた足は、んやんやかすかこんで食事をして、いる人たちがいることだ。

これから述べるのは坐るときに補助具、つまり小さな低いスツールを使う場合である。たとえばアカ族によく見られるのは、ひびひびくらの形の棒が木でできていて、座面に編み込んだ高さ30センチの円形のスツール。これは露台や庭で作業するときや食事のときに使われている。ここにあげたのはラフ族の室内の壁の周りで使われていた高さ30センチ30センチ内外の低い台である。われわれの感覚からいってこれに坐るよりもあぐらをかき、自由に坐った方が楽そうだが、機能上のことよりも文化的な意味があるのかもしれない。

この案にはほかではほとんど使われなくなってきた手作りの生活用具、山刀、弓、小鳥を捕える仕掛け、鳥籠、道標などが見られた。(K1)



Nigel Coats, photo = E.Tremolada



Massimo Iosa Ghini, photo = E.Tremolada

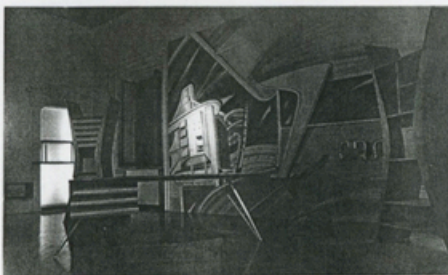
スのトネルリ(TONELLI)はルイジ・セラフィーニ(Luigi Serafini)とアーティストとしての経歴の濃いデザイナーを起用して、やはりアーティスティックなデザイン方向を選択したことを明らかにしている。

プロンスの照明具と銅のテーブルを出したカラトローニ、ガラスとメタルの机や収納家具を出したオキストイド(OXIDO)、ポリテイズムがいくぶん傾向をやらせたマツスイモ・ヨザ・ギニ、メタル素材の扱いがきれいになったロン・アラッド(Ron Arad)など、シングルデザインのデザイナーたちのオブジェはその大方がアーティスティックな、あるいは実験的な、あるいはエモーショナルなデザインを積極的に表に出している。

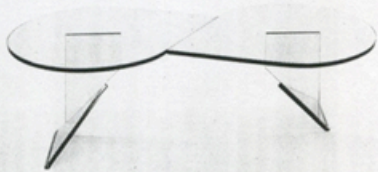
ブレラ地区で開かれた「アビター・レイル・テンポ」(ABITARE IL TEMPO)は、アーティスティックなデザインに強い主導力を持つウーゴ・ラ・ビエトラ(Ugo La Pietra)企画の展覧会。この5月にウエローナの家具見本市で披露された内容に数点の新作を加えてミラノに運ばれたもの。

アルキミア、メンフィスの運動が終わり、セウスがまったく語られなくなった今、運動体としてのデザイン・グループはほぼ存在しないに等しい。代わって注目を集めてきているのが、こうしたアーティスティックなデザインである。思想や哲学や理論などの文化を共通項にするシングル・デザイナーたちが、おそらく明確なグループを作ることなく、各々の立場を守りながら自由なデザインを展開していく、というのが今後のミラノのデザイン状況として予測される。

一九八四年以来、そうしたデザイン・オブジェを商品として扱うのみでなく、製造もしてきた画廊ディルモス(DI: LMOSS)は、期待のジロー(GIRO)第一回展が催された。ジローは、実験的なデザインを企画製造し展示や販売もするという活動で共通する三つの画廊、ミラノのディルモス、パリのネオトウ(NEOTU)そしてアムステルダムのエクハルト(Eckhardt)が、各々を各画廊の支部化して各自の企画や共同の企画を三都市三画廊を舞台に巡回させるというもの。



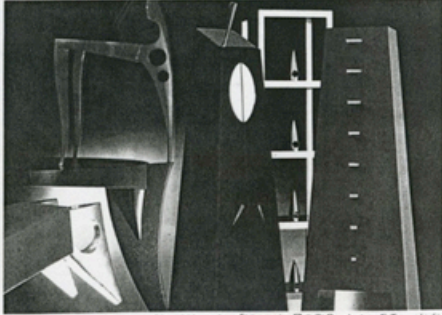
M.Iosa Ghiniの展示会場、MOROSO+DESIGN GALLERY, photo = E.Tremolada



L.Serafini' BIDU, TONELLI, photo = E.Tremolada



Ron Aradiの作品展示、SPAZIO METALS



Prospero Rasulo + Gianni Venanziano' Masterly, 展の作品, photo = E.Tremolada